「がんばっぺ、ふくしま」被災者への心の支援と風評被害への経済的な支援を続ける

文：コープあいづ　役員室　新山敦司（にいやまあつし）

仮設住宅には子どもが多く、事故防止のため敷地内ではリヤカーで商品を運びます。

仮設住宅で暮らす方々への支援

仮設住宅が完成し、避難所やホテルなどから多くの方が引っ越しをされた7月、コープあいづでは、多くの住民が避難や移動を余儀なくされた大熊町（おおくままち）の要請を受け、宅配の配送トラックで引っ越し支援に取り組みました。原発事故で避難されている方は、車を持って来ている場合も多いのですが、年配者世帯も多く、若手の“力”はたいへん役立ったようです。その後、個配や共同購入を利用される方が多くなりました。

仮設住宅への配送担当者は、散歩中の方たちにも、元気に「生協で～す！」と声を掛けながら配送を行ないます。お子さんの学校のこと、ペットのこと、買い物のこと、会津の気候などなど、組合員さんはもちろん、そうでない方とも話が弾みます。慣れない会津でのくらしの中、皆さんいろいろな悩みや不安をお持ちです。つらいお話もありますが、聞くことくらいはできると思い、丁寧にお聞きします。

会津の冬は寒く、雪も多く降ります。冬のくらしを心配する方が多く、今は店舗を利用していても、冬場は宅配を利用するという組合員さんもいらっしゃいます。震災後、コープぎふより支援物資としていただいた使い捨てカイロも配布する予定です。また、被災者の方には、少量でも灯油の配達を行なうことにしており、生協へのニーズが高まっています。

避難所でも、仮設住宅でも、「生協さんは頼りになる」と言っていただいています。

風評被害に負けない活動を

会津地方の放射線量は低いのですが、風評被害により地域経済には大きな影響がでています。会津若松市や喜多方市は観光の街でもありますが、観光客は激減しており、農業に関しても福島県産の農産物が買っていただけず、組合員さんの生活にも影響がでてきています。

そんな中、コープあいづは福島県とも協力しながら「がんばろう　ふくしまキャンペーン」に取り組み、店舗でのチラシ配布や福島県産の農産物コーナーを設けて安全性と利用拡大を呼びかけています。

また、喜多方市にある昭和電工（株）では、8月より国内20の事業所と18の関連会社に呼びかけ、会津のお酒や喜多方ラーメン、県産の農産物などの通信販売を通じて支援してくださり、これまでに500点以上の利用がありました。利用者からは「買うことでしか応援できませんが……」「少しでも復興支援に役立ちたい」といった声が寄せられています。全国からの温かい声や励まし、支援の輪の広がりは、福島に住む私たちへの元気につながります。

福島県は、復興へと確実に歩み始めています。しかし、今の一番の不安は目に見えない放射線被害です。原発事故により、先の見えない状態で知らない土地に暮らすことを余儀なくされている方が多くおいでです。

そんな中、復興活動には心の支えが必要です。被災者を特別扱いするのではなく、押し付けでもなく、「いつでもそばにいます」「いつも見守っています」という気持ちで、手を差し伸べられる支援を続けたいと考えています。

がんばっぺ、ふくしま！

昭和電工・堺事業所での販売会の様子。

生活での悩みなどをお聞きしながら、仮設住宅への配送を行ないます。